

パラレルワールド

第 4 回

「奥さん、大丈夫ですか？」ひろみが心配そうに言った。

加奈子かなこは不思議そうにひろみと齊藤さいとうの顔を見た。

何？ この人たち、わたしの顔をじろじろと見て。

「本当に申し訳ありません」突然、齊藤は土下座を始めた。「ご主人を助けることができませんでした。でも、きつとどこかで助かっておられると思います」

この人は誰だれに謝っているの？ 何を謝っているの？

しばらく齊藤の話聞いているうちにおぼろげながら、何を言っているのかがわかってきた。この人は夫が濁流に飲み込まれて、姿が見えなくなっただけと言っているのだ。

困ったわ。そんなのただの思い過ごしなのに。

それはきつとあの人に似た誰か別の人だわ。それ

なのに、こんなに謝って貰って貰ってなんだか気の毒よ。
「斉藤さん」ひろみが斉藤に呼び掛けた。「加奈子さんの気持ちの整理が付くまで、放っておいてあげた方がいいと思います」

「そうですね。あまりにいろいろなことが起こると、心が現実を拒否してしまうかもしれない」斉藤ははっと我に返ったようだった。「わたし、今から家族を探しに行ってきます。お二人とも、お気を付けて」斉藤は何度も振り返って頭を下げながら、去っていった。

「お名前、ヒロ君だっけ？」ひろみは裕彦ひろひこに向かって言った。「お母さん、疲れているようだから、お姉さんと向こうで遊んでこようか？」

裕彦は加奈子の顔を見上げた。

だが、加奈子は何も言わずにただ自分の正面を見詰めていた。

ひろみは裕彦の手を引いてつれていこうとした。「やめて!!」加奈子は叫び、ひろみの手を振り払った。「つれていけない!!」加奈子は裕彦に抱き着き、泣き始めた。

「すみません、奥さん。ただ、ヒロ君と一緒に遊んであげようかと……」

「放っておいて！ わたしたちを放っておいて！」加奈子はヒステリックに声を上げた。

「あの……わたし……」

「向こうに行って!!」

ひろみはしばらく躊躇ちゆうちよした後、二人から離れていった。

助けて！

加奈子は心の中で叫んでいた。

助けて！ いますぐあの人をここに連れてきて。

裕彦はまた空間に向かって何かを呟つぶやいていた。

「ヒロ君、しっかりして。何を言っているの？

お父さんはここにはいないのよ」そう言った後、

加奈子は苛立いらだちのあまり自分が裕彦に酷いことを言っているのに気付いた。

「お母さん、どうして泣いてるの？」

「お母さんはお父さんに会いたいの！ 今すぐここに来て、わたしとヒロ君を抱き締めて欲しい

の」

「お父さんに会いたいからだって。……もう何度も言ってるよ」

ああ。この子は今、父親と話しているんだ。

加奈子はもう裕彦に何も言わなかった。むしろ、裕彦が羨ましかった。幻覚でも幽霊でもいい。わたしもいまずぐ会いたい。

「キャッシュカードの暗証番号を言ったら、僕を信じてくれる？」裕彦は加奈子に向かって言った。「何を言ってるの？」加奈子は突然脈絡のないことを言い始めた裕彦を不安に感じた。

「今から言うよ。八、三、一、……」

確かにキャッシュカードの暗証番号だわ。いつたいつの間覚えたのかしら？

「次はお母さんの実家の電話番号だよ。〇三……」

この子はどうしていきなりこんなことを言い始めたんだろう？ 今までは数字に興味などはなかった。脳に受けたダメージの影響かしら？

「どうしてその番号を知ってるの？」

「お母さんが『どうしてその番号を知ってる

の?』って言ってるよ」裕彦は空間に向かって言った。そして、加奈子に向かって言った。「お父さんがここにいるからだよ。お父さんしか知らないこと、何でも訊きいて」

えっ? 本当なの? ここに良平さんがいるの?

加奈子は裕彦が見ていた空間を見た。

本当に、ここに良平さんの魂がいるの? だとしたら、わたしに何を伝えようとしているの? いいえ。そう簡単には信じられない。裕彦には悪いけど、絶対に答えられない質問をして、儚はかない幻想を終わらせないと。

「わたしが実家で飼っていたインコの名前は?」

「『わたしが実家で買っていたインコの名前は?』だって」裕彦が言った。

数秒の後、裕彦は言った。「イリス」

目の前が真っ暗になり、そして明るくなりを繰り返した。

知っているはずがない。わたしが知っている限り、良平さんは一度もインコの話を経彦にはして

いない。

「本当にお父さんの幽霊がここにいるの?」

「お母さん、驚いてる。『本当にお父さんの幽霊がここにいるの?』って。……お父さんが『結婚前に住んでいたアパートの住所は?』って訊いているよ」

これはどういう意味? どうして、良平さんの霊はそんなことを訊いてくるの? 意味はわからないけど、とりあえず訊かれたことを答えてみよう。

なかばらちよう
「中原町三丁目……」加奈子は答えた。

裕彦はそれを復唱すると、何もない空間を見詰めていた。

今度は何? この儀式にどんな意味があるの? わたしに何を伝えたいの?

「今、クレジットカード持ってる?」裕彦は言った。「持ってたら番号を読み上げてって」

意味不明の儀式だわ。現代の降霊術ってこういう手続きが必要なの?

だが、加奈子ほもはや馬鹿馬鹿しいとは思えな

くなっていた。ずぶ濡れになった服のポケットから奇跡的に持ってきてきていた財布を取り出し、クレジットカードの番号をゆっくり読み上げた。

裕彦は一桁けたずつ復唱した。

さあ。何が起こるの？ わたしにも彼の姿が見えるようになるの？

「うん。……僕できるよ」裕彦は言った。「これからお父さんとお母さんは長いお話をしなくちゃいけないんだって」

「そうなの？」
じゃあ、わたしにもあの人の声が聞こえるようになるの？

「だけど、お母さんはお父さんの声が聞こえないし、お父さんにはお母さんの声が聞こえないんだ」

そうなの？ わたしが聞こえないだけじゃなくて、向こうもわたしの声が聞こえないの？ 霊ってそんなに不便なものなの？ でも、裕彦の姿と声は見聞きできるってこと？

「だから、僕がお手伝いするんだ。僕はお父さん

が喋しゃべったことをそのままお母さんに言うんだ。そして、お母さんの喋ったことをそのままお父さんに言う。お父さんは『疲れたら、休んでもいい。ゆっくりでもいい。だけど、間違わずにちゃんと話さなくっちゃならない』って。僕、できるって言ったよ」

加奈子は周囲を見回した。

誰も加奈子たちを見ていなかった。みんな精一杯なのだ。他人の言動に注意する余裕などない。

突然、裕彦が霊媒師れいばいしになり、死んだ夫の言葉を伝えたことには誰も気付いていない。もっとも、それが知られたとしても、誰も気にしないだろう。子供がショックで一時的に精神状態が不調になることはそれほど珍しいことではない。問題は母親である加奈子がそれを信じてしまっていることだ。ひよっとすると、自分の精神状態までがおかしくなってしまうのかもしれない。

加奈子は自分の心の中を観察した。

酷くショックを受けてはいるが、正常だという気がする。もっとも、精神に不調がある人物は自

分ではそれに気付けないのかもしれないが。

とにかく、このことは他人には知られないようにした方がいい。もし知られたら、彼女は裕彦から引き離されてしまうかもしれない。

「わかったわ。『お母さんは準備ができたから、お父さんにお話して』と言ってちょうだい」

裕彦は驚くべき話を始めた。

矢倉阿久羅は欠伸をした。

待ち時間は本当に退屈だ。

彼は時計を確認した。あと一分少々だ。そろそろ準備を始めた方がいいだろう。

ターゲットは交差点に向かって、歩道をゆっくり歩いている。計算通りだ。このままの速度なら、あの男は赤信号のため、横断歩道の直前で止まることになる。これは数日間、あの男の行動を観察した結果と交差点の信号の周期を調べてわかったことだ。造作もない。

この交差点を構成する道路の一方は両側に二車線ずつあるが、もう一方は一車線ずつしかないのだ。この道を通る自動車は少ないため、横断する人間は相当に油断してあまり左右を確認しない。

周辺の防犯カメラの位置はだいたい把握している。わざと隠しているようなものはわからないが、防犯カメラを隠す人間は滅多にいない。むしろ、ダミーであっても目立つように設置するのが普通だ。目立つ防犯カメラには犯罪抑止効果がある。衝動的な犯罪には効果がないから無意味だという人間もいるが、多くの犯罪は計画的だ。衝動的に空巣をしたり、強盗を犯したりする人間は皆無ではないかもしれないが、極めて珍しい部類だろう。矢倉はカメラの視野に入らないよう、自分の立ち位置を微妙に調整した。万が一防犯カメラに映り込んでしまっても、それほど問題ではない。直接犯罪を行う訳ではないので、罪に問われる可能性は低いのだ。しかし、何度も防犯カメラに映っていることに気付かれたら、不審に思われることだろう。まあ、不審に思われたとしても彼の能力に思い至る人間はまずいないはずだが、疑われないうに越したことはない。

あと三十秒だ。

矢倉は決して焦らない。最初の頃は焦こもって早目

に行動してしまい、貴重なチャンスを失うことが何度かあった。しかし、何度か経験を積むことによつて、焦りは禁物だということがわかった。たいていの場合、必要な時間はほんの一、二秒なのだ。人間は咄嗟とつさの状況に一、二秒では対応できない。確かに、球技などでは、〇・一秒台の攻防はよくある話だ。だが、それはあらかじめ予め相手が動くことがわかつている状態の話だ。道を歩いているときに突発的にボールが飛んできたら、一、二秒で状況が判断できる人間はいない。矢倉はその一、二秒を利用して商売をしているのだ。タイミングを間違ふことは許されない。

矢倉は腕時計を見て、秒針の動きに集中した。実際に行動に移す時には時計を見ている訳にはいかない。頭の中に秒針の動きを叩きたた込んで、それにしたがつて行動しなければならぬのだ。男は交差点の赤信号の前で止まった。

矢倉はにやりと笑った。

今回はうまく行きそうだ。

あと十秒。

矢倉は腕時計から目を離した。そして遠くを見るような目をしながら、ターゲットの男を凝視する。

当然、ターゲットは矢倉に注目していない。そもそも面識がないのだ。

矢倉はリラックスした状態で頭の中の秒針の動きを追う。

よし、あと五秒だ。

矢倉は突然ターゲットに向かって、手を振った。

「田所^{たしろう}さん、こっちですよー！」

ターゲットは、えっ？ という顔をした。

「こっちです。こっち」矢倉は笑顔で言った。

「急いでください」

ターゲットは軽く会釈して、そのまま、車道に踏み出した。

矢倉はにやりと笑った。

あと一秒。

猛スピードでタクシーが通り過ぎていった。

ターゲットの姿は消えていた。

一斉に悲鳴が上がった。十数メートル程離れた

場所にターゲットは転がっていた。アスファルトの上にゆっくりと血が広がっていく。首と胴体がおかしな方角に鋭角的に折れ曲がっていた。

即死だな。

矢倉は過去の経験から判断した。

タクシーはターゲットを撥ねてから急ブレーキをかけ、交差点のど真ん中でスピンをして、二、三台の車にぶつかった。そっちも結構な大事故だったが、ターゲットとは関係ないので、何人死のうが興味はない。

タクシーの運転手は助かったようで、呆然と事故の様子を見ていた。

こんな場所をあんな猛スピードで突っ走ったおまえが悪いんだ。俺はそれを利用させて貰っただけだ。おまえと話せたら、一つだけいいことを教えてやれたのに、残念だよ。もう一つの世界のおまえは事故を起こしてないってな。まあ、こんな運転してたら、向こうでも事故を起こすのは時間の問題だとは思うが。

矢倉は現場から立ち去りながら、スマホを取り

出した。

「もしもし。今、実行した。金は例の口座に振り込んでおいてくれ」

「早いな。依頼してまだ一週間なのに。どんな方法でやったんだ？」

「ああ。興味があるなら、教えてやるよ。どうせマスコミの報道でわかるから。交通事故だ」

「待ってくれ。それはまずい」

「どうしてだよ？ やり方はどうでもいいだろ？」

「交通事故だと証拠が残り過ぎる」

「それがどうした？」

「それがって、おまえが捕まったら、わたしも危ないだろう」

「俺は捕まらない。あんたのことは知らないが」

「轢ひいたのはおまえか？」

「俺じゃない」

「おまえの部下か何かか？」

「俺には部下なんかいない」

「じゃあ、誰なんだ？」

「知らない」

「冗談はよせ。知らないやつがたまたま田所を轢いたっていうのか？」

「撥ねたんだよ。それにたまたまじゃない」

「自動車に何か細工をしたのか？」

「いや」

「どうやったんだ？」

「それは企業秘密だ」

「証拠は残ってないだろうな？」

「ない」

「運転手とおまえとの接点は？」

「ない。互いに顔も名前も知らない」

「間に第三者が入ったってことか？」

「そんな人物はいない」

「……本当にやったのか？」

「ああ。数時間後には、マスコミ報道で出るだろう。今でもSNSを検索すれば、野次馬の書き込みが見付かると思うぜ」

「そういう意味じゃない。本当におまえの組織んだことかってことだ」

「言ってる意味がわからないんだが？」

「偶然、田所が交通事故にあったのを自分の手柄にしてるんじゃないかってことだ」

「ああ。そういうことか」矢倉は溜め息を吐いた。

「どうして、いつも依頼主は金が惜しくなっちゃまうんだろうな。まあ、碌でもない奴らばかりだから金に汚くても不思議じゃないんだが」

「確かにおまえがやったという証拠はあるのか？」

「あんた、馬鹿か？ そんな証拠を残したら、墓穴を掘ることになるじゃないか」

「証拠がないのなら、金を渡す訳にはいかない」

「ええと。本気で言ってるのか？」

「当たり前だ」

「つまり、あんたは殺しの代金を踏み倒そうって訳だ」

「証拠がないんだから、払う訳にはいかないに決まってるだろ」

「俺は決して証拠を残さない。だけど、今まで俺がやった殺しのリストは存在している」

「あんなものは只のデータだ。証拠にはならな
い」

「話は最後まで聞くもんだ。俺が殺したやつらは二種類に分けられるんだ。一つは殺しの依頼のターゲット——つまり田所みたいなやつだ。そして、もう一種類は俺に殺しを依頼したけれど、支払いを渋ったやつだ。つまり、あんたみたいなやつだ」

「俺を脅す気か？」

「別に恐喝している訳じゃない。あんたが払うと約束した金を払えば、文句はない。だが、そうでないのなら、それなりの報復をさせて貰うということだ。俺はボランティアで仕事をしているんじゃない。そこを曖昧あいまいにしてたら、今後のビジネスにも差し障りがあるんでね」

「俺がおまえみたいな雑魚ざこに殺されて堪たまるものか。返り討ちにしてやる。うちには若いのが大勢いるんだ」

「それは無理だな。もし、そんなことが可能なら、俺はすでに誰かに殺されているはずだ。だけど、俺は生きている。つまり、死んだのは俺を虚仮こけにしたやつらの方だということだ」

「俺がそんな脅しに屈すると思うのか？」

「いや。俺の説明を理解して欲しいだけだ。あんたが約束通り金を払えば、俺は大金が手に入るし、あんたは死なずに済む。いい事尽くめだ。ところがあんたが約束を違^{たが}えたら、俺は金が手に入らないし、あんたは命を失うことになる。二人ともいい事なしだ。よく考えてくれ」

「少し調べてから返事する」

「じゃあ、今この瞬間から俺はあんたの命を狙^{ねら}うことにする。実際に殺せるのは今日か明日か来年かはわからないが、必ず目的を達成する。気が変わったら連絡してくれ。金を振り込んだ瞬間、俺はあんたの命を狙うのをやめるから」

「待て。うちのファミリーを敵に回してもいいことは何一つないぞ」

「俺の敵になったのはおまえの方だ」

「……わかった。金は払おう。だから……」

「じゃあ、振り込みが確認できた時点で、おまえを殺すのは中止する。だけど、それまではおまえはターゲットだ」

「金は払うと言ってるじゃないか！」

「気の毒だが、俺は言葉なんか信じないんでね。信じられるのは金だけだ」

「今から一時間以内に振り込む。だから、俺の命を狙うのはやめてくれ」

「じゃあ、一時間以内に俺があんたの殺害に成功しないよう祈るんだな」

「待ってくれ。もしもし。待ってくれ。本当なんだ。ちゃんと金払……」

矢倉は電話を切った。

これでちゃんと払ってくれるだろう。

もちろん、矢倉は今のところ、今回の依頼主を殺すような気は全くなかった。殺すことは可能だが、下準備は大変なのだ。できれば、殺さずに金を払って貰うのが一番いい。

しかし、俺の能力は説明しにくいのがネックだな。

矢倉は溜め息を吐いた。

まあ、理解し難いおかげで、完全犯罪が可能になる訳だが。

この能力を得たのは一年前のことだった。

あの日、矢倉は家でテレビを見ていた。いつものことだ。

彼はもう何年も前から働くことを辞めていたのだ。働かなくても、食っていけるのに、どうして働かなければならないのか。今は、年老いた両親に寄生しているが、彼らが死んでも、生きていく自信はあった。贅沢ぜいたくさえ言わなければ、働かなくてもなんとかなるはずだ。

矢倉はそんなふうに考えていた。

心身に障害がある訳でもなく、何かに傷付けられたり、挫折ざせつした訳でもなかった。むしろ彼は自分に卓越した知能があると信じていた。だからこそ無駄な競争などはしたくなかったのだ。残念ながら、今の社会では、生まれつきの能力だけで優雅な生活をするのは難しい。生まれつきの才能があるうがなかるうが、人々は死に物狂いの努力をしなければ、最高位に立つことはできない。勉強の世界でも、スポーツの世界でも、芸術の世界で

もそれは同じだった。そして、矢倉はそれに我慢ならなかった。彼は一切の努力なしで自分の才能だけを評価されたかったのだ。それができないというのなら、両親や社会に寄生して生きていく方が遥かにましだ。

なぜ才能ある俺があくせく働かねばならないのか。どうして、才能ある俺が引き籠り等と蔑まれないかなければならないのか。

矢倉は常に心の奥で怒りを感じていた。

外は凄まじい雨だった。だが、家の中にいれば安心だ。こんな雨の中を出勤しなければならぬ者たちのことを考え、少しは溜飲が下がった。彼自身の両親もまた出勤していたのだが、そんなことは気にならなかった。働きたい者は働けばいいのだ。

脇に置いてあるスマホが鳴った。

矢倉は画面を見ようとしなかった。

どうせ気象情報か何かだろう。そんなことはテレビ画面を見ていれば教えてくれる。それに警報だ何だと言っても、実際に被害が出ることなんて

何万分の一の確率だろう。こんな雨の中避難するなんて馬鹿げている。

思った通り、テレビ画面に避難情報が流れ始めた。自分の住む地域が含まれているかどうかすら確認する気にならなかった。

画面の中では、気象予報士が大雨についての解説を始めた。

くだらん。

矢倉はチャンネルを変えたが、どのチャンネルも大雨の話題か、そうでなかったら、教育番組だった。

だから、有料の衛星放送かネット配信に加入したいと前から言ってたんだ。あいつら、俺の言うことに一々反発しやがった。

矢倉はテレビを切った。

つまらないので、酒でも飲んで寝ようかというときになって、またスマホが鳴り出した。

何だ？ 煩うるさいな！

矢倉は画面も見ずにスマホを壁に叩き付けた。どん、という大きな音がした。

あれ？ 俺、そんなに力を入れて投げたっけ？
次の瞬間、ぐらぐらと部屋全体が揺れ出した。

これ、地震か？ そう言えば、さっきスマホが
鳴ってたっけ？

当然、矢倉は逃げたり、身を守ったりはしな
かった。

きつとたいしたことはない。下手に逃げ隠れし
ても、無駄に体力を使うだけだ。どうせすぐに収
まるんだから、何もしない方がいい。

だが、揺れは収まる気配はなかった。それどこ
ろか、どんどん激しくなってくる。

矢倉は食卓の下に逃げた方がいいかな、と思い
始めてきた。だが、ここで隠れたりしたら、さっ
きの自分の考えを否定することになる。そんなの
は嫌だ。隠れたら負けだ。

矢倉は揺れが収まるまで、このままでもいいようと
決心した。

家が傾いた。

まじか!?

そのときには家中のものが目の前を飛び交って

いた。頭上から聞いたこともないような大音響が聞こえてきた。すべての窓ガラスが砕け散り、壁に亀裂きれつが入り、家の外の景色が見えた。

何だ。何だ！ 何だ！！

頭上から木屑や土くれのようなものが落下してくる。

矢倉は上を見上げた。

大きな丸太のようなものが落ちてきた。

「大丈夫ですか？」

「大丈夫ですか？」

誰かが矢倉に呼び掛けている。

目を開けると、救急隊員らしき人物が矢倉の顔を覗のぞき込んでいた。

「あつ。うん」

「意識はあります」

「意識はあります」

頭がくらくらした。目の前の人物が一人なのか二人なのかわからない。そんなはずがある訳がないのだが、実際判断が付かなかった。

両眼の視線が合わないのかもしれないと思い、片目で見てみたが、それでも一人か二人かはわからなかった。

「お名前を教えてくださいいただけますか？」

「お名前を教えてくださいいただけますか？」

「矢倉……阿久羅」

そう言えば、俺はそんな名前だったな、とぼんやり思った。

「意識ははっきりしています」

「意識ははっきりしています」

二人が同時に同じことを言っているようで気持ちが悪いです。

矢倉はもう一度救急隊員をしっかりと見た。

ぼやけて見える訳でも単純に二重写しになっている訳でもない。ほぼ同じ空間に二人の同一人物がいるようにしか思えないのだ。だとしたら、それは一人じゃないかと思うのだが、どうもそうではない。二人の動作が微妙に違うのだ。同じ場所に二人の人間がいて、ほんの少しずれている。そんな感じだった。

二人の顔はそっくりだった。まるで一卵性双生児のように。

矢倉は頭痛を覚え、反射的に頭を触ろうとした。「頭には触らないでください。怪我けがをしていますので」

「頭には触れないでください。怪我けがをしていますので」

二人の言葉が少し違って聞こえた。

そうか。頭を打ったのか。きつと、それで物が二重に見えるんだ。

そういうことはありそうな気がした。

「今から運びますよ」

「今から運びますよ」

矢倉は担架に乗せられ、持ち上げられた。

自分に見えたものが何かわからなかったが、何かの残骸ざんがいだということはわかった。そして、見覚えのある家具や雑貨類が目にとまった。

どうして、うちにあったものがここにあるんだろう？

矢倉は不思議に思った。そして、ここが自宅だ

と思えば辻褄つじつまが合うことに気付いた。

「ああ。俺の家は全壊してしまったんだ。俺はそのときから今まで気を失っていたらしい。」

「地震があったのか？」矢倉は尋ねた。

「はい。かなり大きいものです。それから、洪水もありました」

「はい。かなり大きいものです。それから、洪水もありました」

洪水？ そう言えば、自分も含めて、そこら中びしょ濡れだった。

「怪我の様子は酷いか？」

「そうですね。出血は多かったようですが、もうほぼ止まっていますし、こうしてお話ができますから、大丈夫だと思います」

「そうですね。出血は多かったようですが、もうほぼ止まっていますし、こうしてお話ができますから、大丈夫だと思います」

「煩いな。同時に喋らないでくれ」矢倉は不機嫌になって言った。

「同時に？」

「同時に？」

「二人同時に喋るなって言ってるんだ」

「二人？」

「二人？」

「おまえとおまえだ」矢倉は二人を指差した。

二人の姿がふらふらとぶれた。

「意識に少し混濁があるようです」

「意識に僅わずかな混濁があるようです」

「俺は正気だよ。おかしいのはおまえらだ。一人か二人かはつきりしろ！」矢倉は頭に血が上った。

「まずい。また出血が始まった」

「まずい。また出血が始まった」

矢倉は気が遠くなった。

次に気が付くと、ベッドの上だった。腕には点滴が取り付けられ、バイタルチェックのための電極もあちこちに取り付けられていた。

矢倉は苛立たしさを感じ、点滴を引き抜き、電極を引き剥はがした。

警告音が鳴り出した。

矢倉は病室の様子に不安を覚えた。単に見覚えのない場所だという理由だけではない。何かおかしいのだ。存在感がおかしい。言葉で無理に説明するならば、ベッドも天井も壁も床も窓もカーテンもすべてが二重なのだ。物理的に壁や天井や窓が二重になっているという訳ではない。そうではなく、そこに存在している壁は、実は二つの壁が同じ場所に二つあるということがはっきりわかるのだ。

ドアが開き、看護師が飛び込んできた。二人なのか、三人なのか、四人なのか分からない。分身したり、重なりあったりしている。

目を細めても、収束しない。しかし、どうやら、看護師は二つのグループに分かれているようだということはわかった。若い一人ないし二人と中年の一人ないし二人だ。若い看護師同士、中年の看護師同士は一つになったり分かれたりしているが、若い看護師と中年の看護師が一つになることはない。

「お気付きになられましたか？」一人目の若い看

護師が言った。

「お気付きになられましたか？」二人目の若い看護師が言った。

「ご気分はいかがですか？」一人目の中年の看護師が言った。

「ご気分はいかがですか？」二人目の中年の看護師が言った。

「最悪だ」矢倉は吐き捨てるように言った。「おまえたち何人だ？」

「わたしたちが何人いるか、わからないのでしょうか？」

「わたしたちが何人いるか、わからないのでしょうか？」

「だから、同時に喋るな。聞き取り辛い」

「すぐに田たの中先生なかを呼んできて」一人目の中年の看護師が二人目の若い看護師に言った。

「すぐに大平先生おおひらを呼んできて」二人目の中年の看護師が一人目の若い看護師に言った。

二人の若い看護師が出ていってしばらくすると、二人の医者が出てきた。一人は男で、もう一人

は女だった。

「わたしがあなたを担当させていただいている田の中です」男の医者が言った。

「わたしがあなたを担当させていただく大平です」女の医者が言った。

「どっちが担当なんだ？」矢倉は尋ねた。

「今、言ったようにわたしですが？」

「今、言ったようにわたしですが？」

「だから、田の中か大平かどっちかって訊いてるんだ」

二人の医師は目を丸くした。

「今、何とおっしゃいましたか？」田の中が言った。

「なぜ、その名前をご存知なんですか？」大平が言った。

「田の中と大平だよ。おまえたちが言ったんじゃないか！」矢倉は怒鳴り付けた。

「大平とお知り合いだったのでしょうか？」田の中が言った。

「田の中の診療をご希望なのでしょうか？」大平

が言った。

「おまえら同士で相談しろよ。ふざけてるのか?」

「申し上げにくいのですが、大平は現在行方不明です」田の中が言った。

「田の中は……昨日、亡くなりました」大平が言った。

矢倉はようやく事態の異様さに気付いたようだった。

「おまえら本気で言ってるのか?」

「驚かれたでしょうね」田の中が言った。

「ご存知なかったんですね」大平が言った。

「おまえら同士見えてないのか?」

「何のことでしょうか?」

「何のことでしょうか?」

「ここに田の中って医者がいる」矢倉は田の中を指差した。「頭が半分禿げかかって、眼鏡を掛けた小男だ。そして、ここには大平って女医がいる」矢倉は大平を指差した。「背は高いが小太りで、二重顎だ」

二人の医師はじっと矢倉を見ていた。

「何だよ?」

「大平が見えてるんですか?」田の中間が言った。

「田の中間が見えてるんですか?」大平が言った。

「だから、気味の悪い芝居はやめろ」

「すぐに精神科の先生を呼んでちょうだい」大平は看護師に呼び掛けると、そのまま病室を出ていった。

田の中間はその場に残った。

「おまえは行かないのか?」

「彼女は……大平さんはどんな感じですか?」田の中間は尋ねた。

「さっき言った通りだ」矢倉は答えた。

「何か伝えたがってませんか?」

「聞きたいことがあるのなら、直接訊けばいいだろう?」

「わたしにはできないのです」

「ややこしいやつだな」

「あなたは以前から彼女をご存知だったんでしょうか?」

「知らないよ。さっき初めて会ったばかりだ」

「本当に知り合いではなかったのですか？」

「そうだよ。いつまでこの糞くそつまらない冗談を続ける気なんだ？」

田の中はもう何も言わず、項垂うなだれて病室から出ていった。

「災害前から霊は見えていたのですか？」手に持った下敷きに載せた書類に書き込みながら、初老の医者が尋ねた。

「災害前から霊は見えていたのですか？」もう一人の同じ顔をした初老の男性が尋ねた。

「ええと。あんたらのどっちかはもう死んでるのか？」矢倉はうんざりして言った。

二人の医師は書類から顔を上げて矢倉を見た。

「つまり、ここにはあなたとわたし以外に誰かがいるということですか？」

「つまり、ここにはあなたとわたし以外に誰かがいるということですか？」

「ああ。あんた、死んだ双子の兄弟か何かいるのか？」

「なるほど。その霊はわたしそっくりという訳です
ね」

「なるほど。その霊はわたしそっくりという訳で
すね」

「そうだ。どっちが兄さんだ？」

「残念ながら、わたしは一人っ子です。それでも
う一人のわたしがいるというのは、わたしの右で
すか？ 左ですか？」

「残念ながら、わたしは一人っ子です。それでも
う一人のわたしがいるというのは、わたしの右で
すか？ 左ですか？」

「右でも左でもない。今のところ、ぴったりと重
なっている」

「それは面白い。ぴったり重なっているのなら、
一人に見えるのではないですか？」

「それは面白い。ぴったり重なっているのなら、
一人に見えるのではないですか？」

「すまん。もう一度言ってくれないか？ とても
聞き取りにくかった」

「ぴったり重なっているのなら、一人に見えない

ですか?」

「ぴったり重なっているのなら、一人に見えないですか?」

「一人じゃない。同じ場所に二人の人間が重なって存在しているんだ。そんなことより、奇妙なことが起きているぞ」

「人間と幽霊が重なって存在していることよりもですか?」

「人間と幽霊が重なって存在していることよりもですか?」

「おまえたち、少しずれているんだ」

「先程は同じ場所だとおっしゃいましたが?」

「先程は同じ場所だとおっしゃいましたが?」

「場所は同じだが、一人がほんの僅か遅れて喋っているんだ。どっちか一人に集中して話を聞けば聞き取れないことはないが……」

「なるほど。遅延が生じている訳ですね。実に面白い。ああ。面白いと言っては失礼ですな」

「なるほど。遅延が生じている訳ですね。実に面白い。ああ。面白いと言っては失礼ですな」

「それで、幽霊はどっちなんだ？」

「わたしが人間の方です。まあ、もう一方も厳密に言うと、幽霊ではなく幻覚たぐいの類でしょうが」

「わたしが人間の方です。まあ、もう一方も厳密に言うと、幽霊ではなく幻覚の類でしょうが」

「それじゃあ、教えてくれ。田の中と大平とどっちが幽霊なんだ？」

「大平先生は行方不明になっておられます。大平先生のことはどこで知りましたか？」

「田の中先生は亡くなられています。生前、田の中先生とはお知り合いだったのですか？」

矢倉は頭を押さえて絶叫した。

矢倉にも、少しずつ状況が把握できてきた。

彼は幻覚が見える精神疾患だと思われて、入院を余儀なくされていた。入院費や治療費がどういう扱いになるのかはわからないが、とりあえず今のところ心配する必要はないようだ。被災者ということも関係しているのかもしれない。国からの支援があるだろうし、もしダムの決壊が人災だと

いうことになれば、賠償金すら手に入るかもしれない。両親のことは誰も話さないが、医者や看護師の様子を見るに、どうやら大災害の犠牲者になったようだった。

矢倉は自分に起きていることを自分なりに観察し、分析した結果、一つの結論に達した。

目の前にいる人物は幽霊などではないのだ。同じ人物であっても、別々の人物であっても、どちらかが人間でどちらかが幽霊という訳ではないのだ。単に目に見えるというだけではなく、手で触れることもできるし、体臭を感じることもある。

彼らは人間だ。ただし、別々の現実にも暮らす人物だ。別々の現実と言っても、よくファンタジーに出てくるような異世界ではない。とてつもなく、よく似た世界だ。矢倉はとりあえず世界A・世界Bと呼ぶことにした。

矢倉が本来住んでいた世界はAなのかBなのか、今に至るまで解明できていない。理屈の上では、矢倉が二つの世界を見ることができるようになったのは、あの大災害の後なので、大災害の前の記

録を矢倉の記憶と比較すれば、A・Bどちらが本来の世界であるのかわかるはずだ。

だが、大災害前の記録をいくら調べても、二つの世界の違いは見付からなかった。現在でも二つの世界の違いは極僅かなのだが、大災害の前はもっと僅かな差しかなかったようだ。もしくは全く同一の世界だったのかもしれない。そうだとすると、矢倉の本来の世界がどちらなのかは永久にわからないことになる。

いや。ひよっとすると、大災害前は世界は一つしかなく、災害を切っ掛けとして二つに分離したのかもしれない。

どっちにしても、これは他人より秀でた能力なのだ。精神疾患として扱われるのは間違っている。だが、そう主張すること自体が精神疾患の疑いを強くするだろうということは容易に推測できた。だから、矢倉は二つの世界が見えることを隠すことに決めた。

ある日、病気はもう治ったと医者に申告した。

「本当ですか？」医者Aは疑った。

「本当ですか？」医者Bは疑った。

「はい。本当です」

「見えていたものは何だったと思いますか？」

「見えていたものは何だったと思いますか？」

なぜか医者AとBの言葉はかなりずれていたの
で、聞きとるのに苦労したが、矢倉はなるべく聞き取り辛さを見せないように努力した。

「たぶん幻覚だったと思います。頭を打った衝撃
で一時的に斜視になって物が二重に見えたことで、
誘発されたんだと思います」

医者AとBはしばらく考え込んでいた。

治ったという言葉自体が嘘うそである可能性を考えているのだろうな。ああ。あんたは正しい。これは嘘だよ。

と矢倉は思ったが、もちろん表情には出さなかった。

「わかりました。今後の治療をどうするか、少し検討させていただきます」

「わかりました。今後の治療をどうするか、少し検討させていただきます」

矢倉は脈ありだと判断した。

やつらはこう考えているはずだ。そもそも幻覚が治っていなかったとしても、見えないふりができるぐらいだから、生活に支障はないだろう。それに、大災害でこの付近はどここの病院もいっぱいなのだから、できるだけ早く退院させたい。

予想通り、数日後矢倉は退院することになったと告げられた。

矢倉は仮設住宅に暮らすことになった。もちろん近所付き合いは一切しない。衣食住に不自由しない状態ではあったが、自分の能力を何かに活かせないかとずっと籠って考え続けた。

二つの世界はどちらも矢倉にとっては現実で見聞きすることも触れることも可能だ。だが、それぞれの世界の物同士は干渉しないのだ。例えば世界Aにある茶碗ちやわんを世界Bにある食卓の上に載せたら、そのまま床まで落下して壊れることになる。

世界Aにある石を世界Bにいる人物目掛けて投げても、そのまま素通りして、自分に石が投げられ

たことにすら気付かない。つまり、世界Aにある物を世界Bに持ち込むことはできないし、その逆も不可能なのだ。片方の世界の住人の姿はもう片方の世界の住人には見えない。壁などがあっても、それが片方の世界にしかないのなら、もう一方の世界の人間は素通りできる。二つの世界は互いに存在しないも同然だ。一方の世界の人間はもう一方の世界の人間にとって透明人間だし、いろいろな場所に侵入することもできる。

だったら、好き放題できるように思えるだろうが、実際には何もできない。向こうからはこちらを見たり触れたりできないように、こちらからも向こうを見たり触れたりできないのだから、盗みも盗み見も不可能なのだ。

では、二つの世界に同時に存在する矢倉はどうなのかというと、どちらの世界の住民にも姿を見られてしまう上に、どちらの世界の壁も素通りすることができない。これでは何の旨みうまもない。

単にメリットがないだけでなく、この能力には非常に不便な点があった。なぜか二つの世界に

時差が生じているのだ。最初はほとんどわからなかったが、いつの間にか、会話がずれて聞こえるようになり、それが一秒以上になり、さらに広がり始めた。

誰かの発言が始まって、何秒か経つと、同じ人物が全く同じか、少しだけ違う発言を始める。二人の同一人物の声が互いに干渉して極めて聞き取り辛い。また、聞き取れたとしても、世界Aの相手に対して、世界Bでの相手の発言が終わるまで返事ができないので、反応が鈍い人間になってしまう。逆に世界Aに合わせると、世界Bの相手には話し相手の発言が終わる前に応え始めるせっかちな人間になってしまう。そして、その対応がそれぞれの世界の相手に違った影響を与えるため、会話の内容が二つの世界で変化してしまうことが多々あった。すると、矢倉の対応はますますちぐはぐなものになってしまった。例えば、こんな感じである。

「矢倉さん、ここの生活には慣れて来られましたか？」

「矢倉さん、ここの生活には慣れて来られましたか？」

「ああ。そうかな」

「どうしたんですか？　今、考え込んでおられましたが、何か心配事でも？」

「すみません。今、話し掛

けてしまって、ご迷惑でしたか？」

「面倒だ。帰ってくれ!!」

矢倉は、どちらの世界でも人付き合いの悪い変わった人物だと見做みなされるようになってきた。彼は殆どほとんどの時間一人で過ごし、時折無言で買物をするだけの生活になっていった。

そして、あるとき、二つの世界の時間差が一分を超えていることに気付いた。ぼんやりテレビで野球中継を見ていると世界Aのある選手がホームランを打った。そして、約一分後に世界Bでも同じ選手がホームランを打った。

矢倉にとって、それは日常なことだった。

他のやつらはいいな。同じホームランを二度も見なくていいんだから。

……えっ？

そう思った後、その言葉の意味をもう一度考えてみた。

世界Aの住人は世界Bの住人より、早く試合の展開を知ることができる。しかし、その情報は世界Bに伝わるのがないため、世界Bでは誰もこの先の試合展開を知ることにはない。ただ一人の例外を除いて。

矢倉は世界Aでは何の変哲もない男だが、世界Bでは予知能力者になれるのだ。ひよっとすると、予知能力者というのは自分と同じような人間なのかもしれない、と思った。もし、今までそんな者たちが本当にいたらの話だが。

矢倉は隣近所の仮設住宅を片っ端から訪れ、賭^かけをしようと持ち掛けた。

たいていの住民は話に乗ってこなかったが、中には目を輝かせる者たちもいた。

「それで、どんな賭けだ？」

「それで、どんな賭けだ？」

「野球で一分後の試合展開を当ててるんだ」

「何だそりゃ？ どういうルールだよ？」

「何だそりゃ？ どういう

ルールだよ？ 意味がわからん」

結局、矢倉の提案する奇妙な賭けのルールに合意する者はいなかった。

矢倉は公営ギャンブルについて調べた。世界Aでレースもしくは試合が終わってから、世界Bで勝った側の券を買えばいいのだから、話は簡単だ。しかし、馬券・車券・舟券などはレース開始数分前にメ切になるが、サッカーくじに至っては数分から最大数時間前だ。いずれにしても、世界Aで試合が終わった時点ですでにその試合の券を世界Bで買うことはできなくなっている。全く話にならない。

もちろん、このままさらに時間差が開くのを待っていてもいいが、それにはおそらく何年も掛かるだろうし、本当にどんどん時差が開いていくという確証もなかった。ひよつとすると、どこかで時差の拡大は止まってしまいかもしれないし、逆にどこかのタイミングで時差縮小のサイクルに入

ってしまいかもしれない。とても待ってなんかいられない。

そんなある日、矢倉はある光景を目にした。

近くのコンビニに食糧調達に行く途中だった。

信号待ちをしていると、群衆の中からふらりと目が虚ろになった中年男性が歩き出し、車道に入り込んだ。

猛スピードで突っ込んできたトラックが男を轢いた。凄まじい血が飛び散り、現場は騒然となる。世界Aの人々は、逃げ出したり、電話を掛けたり、写真をとったりで、大混乱だ。

しかし、世界Bの人たちは全く平穏な状態だった。

雑踏の中を歩くとき、二つの世界の住民を区別することは殆ど不可能なのだが、そのときは面白いように区別が付いた。

轢かれた男はしばらくもぞもぞと動いていたが、すぐに動かなくなった。

あれだけ血が出たら、もう無理だろうな。まだ救急車は来ないが、もう面白そうなことはないだ

ろうな、と矢倉は思い、その場を立ち去ろうとした。

ちょうどそのとき、信号待ちをしている雑踏——世界Bの平穏な雑踏の中から、ふらりと目が虚ろになった中年男性が車道に向かって歩き出した。

ああ。なるほど。こいつ、これから死ぬんだな。……待てよ。世界Aでは、このおっさんはすでに死んでいる訳だが、世界Bではまだ生きているんだ。だが、世界Bでは、これからこのおっさんが死ぬことは誰も知らない。知っているのは、俺一人だ。

矢倉は愉快的気分になった。

覚悟の自殺か単に意識が朦朧もうろうとしているだけかはわからないが、たぶん気付いた人間がこいつを止めたら、死ぬことはないはずだ。もちろん、そんなやつは一人もない。なぜなら、誰もこのおっさんがこれから死ぬとは思ってないからだ。そして、俺は止めることができる。放っておけば、おっさんが死ぬのがわかっているからだ。もちろん

ん、俺は止めたりはしない。同じ事故が二度も生で見られるなんて実にスリリングだ。

男は先ほど世界Aで通ったのと寸分たがわぬ経路を通った。そして、全く同じコースで猛スピードのトラックが突っ込んできた。

今度は世界Bの群衆が騒然となった。逃げ出したり、電話を掛けたり、写真をとったり、先程の世界Aと全く同じ反応だ。

そして、男Bはもぞもぞと動き、男Aと完全に重なって動きを止めた。

やがて、サイレンが鳴り、世界Aの救急車がやってきて、男Aを運んでいった。

後には男Bだけが取り残された。

少し遅れて世界Bの救急車が到着する。

ほぼ同じことが繰り返されたのだ。

矢倉は満足した。

世界Aでは、俺は一般群衆と同じ立場だったが、世界Bでは全く違った。俺だけが未来を知っていたのだ。俺はあの男を救うこともできたし、見殺しにすることもできた。つまり、あの男の生死は

俺に委ねられていたことになる。俺は神のごとき存在だったのだ。俺は自分の意思であの男に死を与えたことになる。

笑いが込み上げてきた。

ざまあみろ。俺はあの男を助けてやれたのに、わざと見殺しにしてやったのだ。神だけの特権だ。

ちよつと待てよ。俺には、死ぬべき運命の人間を救い出す力があるとしたら、その逆はどうなんだ？ 俺は死ななくてもいい人間に死を与えることができるのか？

矢倉は近くの別の交差点に行き、自動車の動きに注目した。

時折、猛スピードで歩道すれすれを走り抜ける危険運転をする車が通った。

もちろん、交通事故は起こらない。

世界Aで危険運転車が通り過ぎた後、矢倉は腕時計を見て世界Bでその車が通るタイミングを測った。そして、一番前にいる若い女性のすぐ後ろに回り、彼女にだけよく聞こえる程度の大きさの声でこう言った。「後ろに蛙かえるがいるぞ」

「えっ?!」女性は驚いて、後ろを振り返りながら、車道の方に飛び出した。

抜群のタイミングだった。

危険運転車は女性の下半身に突っ込んだ。彼女はくるくると回転しながら、フロントガラスと屋根にぶつかり、そのまま地面に落下した。

首が変な方向にねじ曲がっていた。

びくびくと痙攣けいれんしながら、目玉をぎよろぎよろと動かしていた。目も痙攣していたのかもしれないし、自分を死に追いやった犯人を見付け出そうとしていたのかもしれない。

そして、偶然なのか、意図的なのか、矢倉と目が合った。

矢倉は思わずにやりと笑ってしまった。

若い女性は絶望の表情を浮かべた直後、目玉が裏返り、動きが止まった。

矢倉は歯を食い縛って笑いを押し殺した。

自分は人の生き死にを左右することができる。

このことに気付いてから、矢倉の人生は一変した。

目の前が薔薇色ばらいろになった。折角の予知能力がギャンブルに利用できないと知って落ち込んだが、それよりも素晴らしい使い道だ。本来、死ぬべきでなかった人間を殆ど手を汚さずに殺すことができる。もちろん、なんらかの最低限の働き掛けは必要だが、それだけで殺人を立証するのは不可能だろう。つまり、司法は彼を裁くことはできないのだ。